
ナイトクライマー

九榎むつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトクライマー

【Nコード】

N4904BA

【作者名】

九榎むつき

【あらすじ】

重複投稿。ヤモリを見て思ったネタもの。
一応ラブストーリーにしておりますが…。

ちょうど23時を回ったあたりだったと思う。住居兼オフィスであるこの室内で、急ぎの仕事をしていた時だ。

窓の向こう、遠くに街の灯りが見える程度の暗闇の中を、人影が動いたような気がした。

…なんだ？

気のせいか、と思ったのには理由がある。何故ならここは44階の、高層マンションだからだ。

きつと、根を詰め過ぎて、目がおかしくなったのだろう。休憩がてら、席を立つ。

香り高い珈琲をカップに注ぎ、先程の窓辺へ場所を移し、気分転換に外を眺めた。

はめ殺しの大きな窓からは、街の夜景が静かに煌めいて見える。今日はこの位にしておこう…。そう思った瞬間、今度ははっきりと人影を見た。

「……………」

黒い革の服に身を包み、一瞬で通り過ぎる。黒い髪が乱れながら、窓を滑り落ちた。

その白く美しい目元が、脳裏に焼き付いて離れない。

嘘だ、と思った。

いや、確かにはつきりと見た。

だが、ここは44階だ。それにこの上にはまだ10階以上、階もある。

「……………」

取り敢えず、今日の所は休もう。考えるのは明日にしよう。

疲れ過ぎておかしくなった自分を労るように、デスクの上も全てそのままに、寝室へ足を運んだ。

翌日。

残りの仕事を終え、その他すべき事も、大体は片付いた。時計の針は、昼食を取るには、まだ少し早い時間を指している。

少しは体を動かしておかなくては、な。

この所、部屋を出る時間すら、ろくになかったのだ。

たまには運動しておかないと、実に不健康極まりない。

ウォーキングの準備をして、そのまま出掛ける。勿論、昼食も外で済ませるつもりだ。

ヒルズマンションを出て、快調に歩を進める。

連日の猛暑が身体を苛んだが、それでも水分を補給し続け、足を進める。

少し離れた、市街の緑地まで足を伸ばす。目的の場所へと到達して、漸く歩くのを止めた。

木漏れ日が爽やかに、火照った身体に降り注ぐ。

緑地のシンボルツリーである大楠の周辺で、5番目の大きさに当たる楠の木。大木ではないが、お気に入り入りの樹であった。

その根元に置かれたベンチに腰掛け、疲れた体を投げ出す。休憩を取っていると、不意に、白い人影が横切った。

白いワンピース、白い日傘、白い肌と、なびく黒髪。

そして、腕に浮かび上がるトカゲの刺青。

アクセサリーのように、張り付いている、トカゲの輪郭。不釣り合いなイメージに、脳が違和感を覚える。

しかし同時に、彼女に自然と溶け込んでいた。

「御覧になれますか。」

にこやかに、彼女は言った。その目元が美しく、魅了する。既視

感に似た錯覚が惑わしているようでもあった。

…そんなにも凝視していたのだろうか。

話しかけられるまで、気付かなかった。

また、彼女は別段それを気にする風体でもなく、近寄ると、ごく自然に腕を差し出して、見せてくれた。

『守り神』なんです。私の。

そう言って、愛しげに刺青の入った腕を撫でた。

どきり、と鼓動が脈打った。一瞬止まったかに思えた心臓はゆっくりと、確認する様に、一鼓動ずつうねっている。

彼女の眼差しが美しく微笑んだ。木漏れ日の陰影が、そんな彼女を見え隠れさせているようだ。

「では、失礼」

鮮やかに、笑顔を残して彼女は立ち去った。白いワンピースと、白い日傘が、夏の日差しに溶け込んで消えていく。

不思議な光景に、暫し呆然とその、後姿を眺めているだけであった。

結局、何処へ寄る気にもなれず、昼食はヒルズのラウンジで済まそうと、エントランスの扉を潜った時だ。

2つ下の階の、IT仲間である山波氏に偶然会い、軽く話をする羽目になった。

「この間はどうも。お陰様で、取引に穴空けずに済みましたわ。」

「いえ、こちらこそ。」

軽く受け流す。

ちよくちよく仕事を頼まれはするものの、どちらかと言えば、苦

手なタイプだ。

「そう言えば、例の会社、顧客情報を昨晚の内にこっそり持っていたら幸いですよ。」

例の会社、と言えば、40階に事務所を置く、あの会社か…。何かと色んな意味で噂になっていた会社だ。

「顧客情報とは珍しいですね。」

確かあそこは、顧客情報だけ別に、サーバーに繋がらないPCで管理していた筈だ。

「社員にスパイでも？」

ごく自然な、当たり前前の流れで言った…。つもりだった。

「いや、それがどうも物取りの仕業らしいって、話なんですよ。」

不意に昨夜の光景が蘇る。

闇に浮かび上がる、白く美しい目元。

顔の大半は黒いマスクで覆われていたので、そこだけが強調されて残っている。

「先程まで警察の人間がそこいらを彷徨っていましたよ。」

本当に鬱陶しくて、かないませんわ、と苦笑して喋る彼の言葉に、内心冷や汗を浮かべ、聞いた。

愛想笑いをするのが、精一杯であった。

何が起こったのか。

いくつかの符号を組み合わせる。

物取り… 昨晚… 窓辺に移る人影。

恐らく、昨夜見た人影は、先程の話にあった泥棒であろう。解らないのは、何故あの窓の外を通って行ったのか、だ。

はつきりと覚えている、あの美しい目。白い目元に浮き上がるように、黒い瞳が輝いている。

…何処かで？

曖昧な記憶が、既視感のような錯覚を思い出させた。

白いワンピースに、微笑む瞳。

心臓が飛び出す程、激しい動悸が身体を襲う。

雷に打たれたように、脳裡に交錯した。

間違いない。確証はないが、恐らく彼女だ。

だが、何故…？ 疑問ばかりが増えていく。

彼女は知っていて、近付いてきたのか？ それとも、唯の偶然なのか。

解らないまま、日が落ち夜になっていく。

複雑な心境が渦巻くなかで、静かにその夜は過ぎて行つた。

翌朝。

一晩中、碌に眠る事も出来ず、ぼーとする頭を抱えて、朝食を取る。

一昨日の件で、警察が聴き込みに回っていると、御丁寧に山波氏からメールが届いた。関わりたくはないが、そうもいつてられないだろう。

そうこうしていると、案の定こちらにも回ってきた。

「…はい？」

「こういふ者ですが、捜査にご協力願います。」

定番の手帳を見せ、二人の男が立っていた。内容は、聞かれる前から、分かっていた。いいタイミングだ。

寝起きのこの状況を利用して、さつさと片付けてしまおう。
真剣に考える振りをしながら、覚えていないと振り払う。

向こうも、今聞いたところで無駄だと判断したのか、名刺だけ置いて帰った。

部屋に戻る。

とある壁の、一点を見据えた。

彩りのない部屋の中で唯一、殺風景な壁を飾る絵画だ。

小さな額面の中の絵には、大きな熱帯性の植物の葉の上に寝そべる、爬虫類の姿が描かれている。

身体をくねらせ、尻尾の先を丸め、5本の指を広げている。

彼女の腕にあった刺青と同じだ。

触れよう、としたがやめた。まだ…その時ではない。

ひと溜め息を吐いて、まずは着替える。

出掛ける支度をして、部屋を後にした。

確認をしたかったのだと思う。昨日と同じ、ベンチに腰掛け、彼女が現れるのを待った。

待てど暮らせど、一向に彼女は現れない。ここに来れば会える…と、浅はかな思いに、どうしようもない気持ちが募っていく。
確証は無いのだ。もしかしたら、もう二度と彼女とは会えないのかもしれない。

たまたま、偶然に会っただけ。

それならそれでも良かった。そう確証されたなら安心出来る。違うにしても、彼女に会える確率が上がる。

木漏れ日が、夏の日射しを柔らげる。じつとりと汗ばむ中、ただひたすらに座り続けた。

日が陰り、暗くなるまで。

部屋に戻ったのは、20時を過ぎていた。

明かりを点けると、殺風景な部屋の中央に、何故か絵画があつた。壁に掛けてあつた、あの絵だ。

「！！」

慌てて駆け寄る。

絵の一部が切り取られ、代わりにメモが挟まれていた。

“貴方との一時、楽しかったわ。”

短い文章と共に、キスマークが捺されている。

紙には彼女の刺青と同じ柄が印刷されていた。

そうか。わかった。

メモを手にして、ソファに深く身を沈ませる。

思い出したのだ。彼女の正体を。

深く息を吸い、全てを吐き出した。

あれは、あの刺青は“トカゲ”ではない。この絵に描かれているのと同じ“ヤモリ”だ。

——ナイトクライマー

そう呼ばれた女が、かつて存在した。

彼女のトレードマークは、夜間に自由に壁を伝い歩く“ヤモリ”だ。

そして、この絵から持ち出されたのは、決して表に出してはいけない、社会の裏の極秘情報。

かつて、その為に彼女が命を落としかけた、危険極まりない代物。生きていたんだな。

不思議と、笑いが込み上げてくる。どうにも止まらない。

腹を押さえ、蹲る様にひとしきり、笑い転げながら、ただひたすらに泣いた。

切り札だったんだ、彼女に逢う為の。

もうこれで、彼女に逢う術は無くなってしまった。持って行かれたデータと恋心は、二度と元には戻らない。

それでも、フツと彼女が微笑んでいる気がした。また逢いに来る、と空耳のメッセージを残して。

守り神なんです。私の。

絵の中のヤモリが静かに笑った。

――了――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904ba/>

ナイトクライマー

2012年1月13日17時45分発行